

同 志 社 大 学

2019 年度 個人研究費研究経過・成果報告書

2020 年 3 月 13 日提出

所 属	職名	氏 名
全学共通教養教育センター	助教（有期）	綱井勇吾

研 究 題 目	第二言語としての日本語の助数詞カテゴリ学習における交互練習の効果に関する研究
研 究 成 果 の 概 要	<p>本研究の目的は、第二言語の意味の仕組みを発達させるメカニズムを探求する点にある。具体的には、集中練習と交互練習の効果を比べ、どのような練習をすれば、第二言語による意味の発達を助長できるのかを解明する点にある。また、練習効果に及ぼす個人差要因を探求する点にある。なお、ここでいう集中練習とは、カテゴリAの事例を学んだ後にカテゴリBの事例を順番に学んでいく練習のことを指す。これに対して、交互練習とは、カテゴリAとカテゴリBの事例を順不同に交互に混在させながら学ぶ練習のことを指す。</p> <p>本年度の研究成果を整理すると、(1) 刺激アイテムの精緻化と、(2) 個人差を測るツールの検討の2点となる。</p> <p>まず、刺激アイテムの精緻化について報告する。練習の効果を検証するときの問題になるのが練習時とテスト時に使用するアイテムの数とその種類である。そこで、これまでに作成した刺激材料を改めて見直し、テスト時に含めるアイテム数を増やすべく予備調査を2回行った。予備調査では、日本人大学生にモノの写真を見せ、モノを数えるのに最も的確な日本語助数詞を1つ答えてもらった。計画では、(練習の効果を検証する調査時には) 練習の前後を含めて合計で3回のテスト(プレテスト+ポストテスト+遅延ポストテスト)を予定しているので、幅広い種類のアイテムを含めることは、暗記による解答を防ぐ上でも大切である。調査の結果、刺激アイテムを精緻化することができた点は成果である。</p> <p>次に、個人差を測るツールの検討について報告する。最近の研究によると、カテゴリを学習するときのマインドセットが人によって異なり、暗記に頼りがちな人とルールを発見しようとする人では練習効果が異なると報告されている。そこで、個人差を測るツールを吟味すべく、関数学習課題を検討した。この課題は、コンピューター上に提示された2桁の数字をインプット量として、インプット量に対するアウトプット量を予測するという課題である。課題はPythonプログラミング言語で作成されていたものなので、動作確認するのに時間を要したが、説明文を日本語に訳すなど微調整を行った上で、使用するつもりである。文献調査の結果、個人差を測るツールについて理解を深めることが出来た点は成果である。</p>

当該年度における研究計画達成度 (以下①～④のうちから、該当する評価を回答欄に記入してください。)

回 答	④	①当初の計画以上に進展している。 ②おおむね順調に進展している。 ③当初の計画よりやや遅れている。 ④当初の計画より遅れている。
-----	---	---

研究成果発表
 大学のすべての教員は、研究業績を [researchmap \(https://researchmap.jp/\)](https://researchmap.jp/) へ入力することとしています。

<ul style="list-style-type: none"> ・ 過去 1 年間の個人研究費等に係る業績等を researchmap へ入力・更新し、researchmap に表示されている「更新日」を右記へご回答ください。 ・ researchmap に関する問合せは研究開発推進課までお願いいたします。 	更新日	2020年 3月13日
---	-----	----------------

※本報告書は大学ホームページ上で一般公開されますので、秘匿性のある情報(研究アイデア、知財情報、個人情報)の記載は行わないようご注意ください。

同 志 社 大 学

2019 年度 個人研究費研究経過・成果報告書

2020 年 3 月 12 日提出

所 属	職 名	氏 名
全学共通教養教育センター	准教授	内山 八郎

研 究 題 目	英語教育の為の定量解析；TOEFL の指導法について； 英語教育の中の社会関係資本
研 究 成 果 の 概 要	<p>本年度は昨年から引き続き、JGSS のデータセットを用いて、統計解析を行い、Self-Assessed Reading Comprehension in English Among Adults in Japan: Implications of Lifestyle and Information Technology と題する論文としてまとめた。2020 年度中にある学会誌へ投稿する予定にしている。</p> <p>2020 年の 3 月 21 日に横浜で開催される予定であった、日本国際教養学会の全国大会にて Reflections on Secondary Data Analysis と題する、二次分析に関するポスター発表を、日本の英語学習に関する統計解析を例に挙げながら行う予定であった。準備は順調に進んだが、新型コロナ・ウイルスの拡散と蔓延への懸念をうけて、大会はキャンセルになった。準備したポスターの内容は来年度の同学会全国大会にてポスター発表として活用する予定にしている。</p> <p>また、共同研究者として統計解析の研究に参加し、結果を B.I.T.---Development of a Dynamic Visualization Tool for Bayesian Inference on Various Types of Normal Distributions for Medical Decision-Making and Education と題される英語の論文にした。共著者として新潟医療福祉学会誌へ投稿し、採択・掲載された。</p>

当該年度における研究計画達成度 (以下①～④のうちから、該当する評価を回答欄に記入してください。)

回 答	3	①当初の計画以上に進展している。 ②おおむね順調に進展している。 ③当初の計画よりやや遅れている。 ④当初の計画より遅れている。
-----	---	---

研究成果発表
 大学のすべての教員は、研究業績を **researchmap** (<https://researchmap.jp/>) へ入力することとしています。

<ul style="list-style-type: none"> ・ 過去 1 年間の個人研究費等に係る業績等を researchmap へ入力・更新し、researchmap に表示されている「更新日」を右記へご回答ください。 ・ researchmap に関する問合せは研究開発推進課までお願いいたします。 	更新日	2020 年 3 月 12 日
--	-----	--------------------

※本報告書は大学ホームページ上で一般公開されますので、秘匿性のある情報（研究アイデア、知財情報、個人情報）の記載は行わないようご注意ください。